

埋文さいたま

埼玉県の遺跡と出土品の情報誌

No. 66

特集 2

勾玉
まがたま

特集 1

新たに

国の史跡に指定

みなみひきかまあと
南比企窯跡
さんのうづかこふん
山王塚古墳

(川越市)

(鳩山町)

鳩山町 南比企窯跡 石田遺跡第1次A区1号窯・1号竪穴建物全景

写真：鳩山町教育委員会

さいたま発掘情報

(2022年1月～12月)

令和四年度 文化財収蔵施設 新収蔵資料

まいぶん探訪

寄居町鉢形城歴史館



埼玉県マスコット
「コバトン」「さいたまっち」

監修/発行 埼玉県教育委員会
企画/編集 公益財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

彩の国
埼玉県

新たに 国の史跡 に指定

特集
1

このたび、鳩山町に所在する南比企窯跡と、川越市に所在する山王塚古墳が国の史跡に指定されることになりました。史跡とは「日本の歴史を正しく理解するうえで欠かせない学術的価値をもつ重要なもの」とされています。今回の指定により、県内の国指定史跡は25件になります。

国史跡指定

東日本最大級の窯跡

みなみ ひ き かま あと

南比企窯跡（鳩山町）

概要

南比企窯跡は鳩山町を中心に、嵐山町・ときがわ町・東松山市の一部にかけて、東西約4.5キロ、南北約5キロの範囲に分布しています。6世紀前半から10世紀中頃にかけて操業され、作られた製品は武蔵国内の地方官衙や集落、武蔵国分寺・国府のほか上野や下総、相模などに供給されていました。今回指定を受ける石田遺跡、天沼遺跡、新沼窯跡は共に鳩山町に立地しています。

新沼窯跡・天沼遺跡 俯瞰（東から）



新沼窯跡 B 区全景
（北東から）



天沼遺跡 B 区
灰原遺物出土状況（南東から）

指定までの流れ

平成21年に文化庁が視察を行い、石田遺跡などを史跡指定することが望ましいとの評価を受けました。平成24年から平成27年にかけて石田遺跡第2次～4次調査を実施し、平成22年から平成24年にかけて新沼窯跡第1次～4次調査を実施しました。

令和4年には南比企窯跡のこれまでの調査結果を総括した『南比企窯跡群総括報告書Ⅰ』を刊行しました。その後、意見具申書を提出し、国の文化審議会の答申を経て国史跡に指定されます。



新沼窯跡 12号窯跡全景
(南東から)

南比企窯跡は、大正8年(1919)に旧亀井村(現鳩山町)郷土史家の小鷹健吾が村内の窯跡を踏査し、私家版「亀井窯趾郡につきて」において15地点の窯跡の存在を明らかにしたことにより、知られるようになった。戦後になると、立正大学や早稲田大学、東京大学による発掘調査が行なわれ、窯の構造や出土遺物と供給先との関係の究明が進んだ。昭和51年(1976)からは埼玉県立歴史資料館(現埼玉県立嵐山史跡の博物館)による分布調査が行なわれ、窯跡の分布範囲や窯数等が明らかにされた。その後も鳩山町教育委員会による鳩山窯跡群の調査など継続的な調査が行なわれている。

新沼窯跡 出土須恵器



新沼窯跡 鬼瓦

石田遺跡

7世紀後半～10世紀中頃までの瓦窯19基、竪穴建物5軒、瓦溜まり1箇所が確認されている。7世紀後半以降の窯体構造の変遷や勝呂廃寺等に瓦が供給されていたことが分かっている。出土遺物には瓦、須恵器、土師器、鉄製品、陶製仏殿がある。

新沼窯跡

8世紀中頃～後半を中心に操業した窯跡で、窯跡26基、灰原等が確認されている。出土遺物には、須恵器、円面硯、瓦、鬼瓦、埴、瓦塔等ある。瓦には郡名や郷名、人名、記号等の文字瓦があり、武蔵国分寺創建にあたり集約的な瓦生産が行なわれたことを示しており、造瓦体制の実態を知るうえで重要な遺跡である。

天沼遺跡

8世紀中頃～9世紀中頃の窯跡2基竪穴建物9軒等が確認され、新沼窯跡の工房・工人集落と考えられる。

南比企窯跡



比企郡鳩山町大字赤沼字石田 1415 番
1 ほか

監修：鳩山町教育委員会

国史跡指定

じょうえん かほうふん
日本最大の上円下方墳

さんのうづかこふん
山王塚古墳（川越市）



山王塚古墳の遠景（南から）



復元図
（縮尺1/1000）

羨道で検出した前門柱石
（南から）

概要

山王塚古墳は川越市大塚一丁目および豊田町三丁目に所在し、武蔵野台地北端部の西側縁辺に立地します。7世紀第3四半期に築造された上円下方墳です。上円部の直径37m、下方部一辺69m、墳丘盛土の高さ5m、周溝を含めた規模は一辺約90mで、墳丘の遺存状況は極めて良好です。



これまでの成果

平成24年度から平成29年度に実施した4回の発掘調査で、墳丘構築過程、主体部形状、築造時期等を明らかにしました。

古墳は旧地表面を整地した後に、上円部、下方部・周溝の順で成形されています。また、墳丘は関東ロームを叩き締めて構築されていました。埋葬主体は南に開口する奥行き9mの3室構造の横穴式石室にハの字状に開く長さ6mの前庭部が伴うものです。良質な関東ロームを版築工法で叩き締めて構築した高さ1.8mの基壇状の盛土の上に構築されています。



羨道礫床検出状況
(南から)



羨道の側壁検出状況 (南東から)



羨道から出土した須恵器
(フラスコ形長頸瓶)



前庭部から
出土した須恵器
(平瓶)

指定までの流れ

昭和33年に川越市の指定史跡となりましたが、その後、山王塚古墳の史跡整備を求める地元住民の声が挙がり、それを受け平成24年から史跡の内容確認調査を実施しました。平成26年には川越市山王塚古墳調査検討委員会を設置し、指導を仰ぐとともに、文化庁、埼玉県とも継続的に協議を行いながら調査を進めました。

これらの成果をもとに、平成31年3月に総括報告書を刊行し、令和4年8月に文部科学大臣へ意見具申、令和4年12月16日に国の文化審議会から文部科学大臣へ山王塚古墳を国史跡に指定するよう答申されました。今後の官報告示を経て国史跡に指定されます。



川越市大塚一丁目21番12ほか

監修：川越市教育委員会